

単離されている。最近、アオコ構成種の藍藻類からミクロシスチン以外にプロテアーゼ阻害活性を有する多数の新規ペプチドが単離・構造決定されている。

(村上昌弘・東大農)

フグ毒の最近の話題

フグ毒は古くて新しい話題で、これにまつわる話はいつまでもつきない問題を提供している。

フグ毒の動物界における分布は、フグ以外のいろいろな動物に広がってきたものの、いまのところ出つくした感がある。フグ毒保有動物は共通してフグ毒に高い抵抗性をもつが、イモリはとてつもない抵抗性があり、皮膚にフグ毒の分泌腺が存在することは、フグ毒抗体により明らかにされている。バクテリア由来の、フグ毒の起源が更に幾段階の生物濃縮等で高等動物に蓄積される過程

で以下のいくつかの *in vivo* における未解決の問題が、現在日本水産学会などで議論されている。

- ① フグの毒化に際していかにフグ毒をもつ餌を見分けて摂取するか。
- ② 各種溶媒に極めて難溶なフグ毒テトロドトキシン (TTX) がフグ体内でどういう形で存在するのか。
- ③ フグ毒保有生物がフグ毒に抵抗性が強いことに関連して、フグ体内における TTX 蓄積組織と Na チャンネルの分布との関係。
- ④ フグ毒保有生物の Na チャンネルの構造と数。
- ⑤ フグ毒保有動物における、毒性をマスクする、TTX と特異的に結合する (高分子) 化合物の存在。
- ⑥ TTX の前駆体の存在。

これらの諸問題もほどなく、日本水産学会の場で解決されることを期待したい。 (野口玉雄・長大水)